

令和4年度「土砂災害防止に関する絵画・作文」作文中学生の部  
全国治水砂防協会千葉県支部長賞

「日本の土砂災害対策」

千葉県 千葉県立東葛飾中学校二年 畑佐 周生

八月初頭に、東北地方から北陸地方にかけての豪雨災害があった。NHKのニュースで知ったのだが、最初は信じられなかった。今までどこか一箇所でも豪雨が降ることはあったが、一週間にも及ぶ豪雨が複数場所に降り注いだとは本当に信じられなかった。大金をかけて作った砂防ダムがあっさりを超えられて、土砂や木々に家々が破壊される様子は痛ましかった。この前には熱海市でも大規模な土砂崩れがあり、雨のたびに土砂災害が起こっているのではないかと思われるくらい多くの被害がでていると思う。今回は、私が考えた土砂災害対策についての問題点を三つに分けて書こうと思う。

まず最初に身近な対策について振り返ってみる。車やバスで山道を走っていると、切り通し区間や谷の崖等に山肌補強のための網やコンクリートブロックが取り付けられているのがよく分かる。また、各地で大規模な砂防ダムが建設されるという話はニュースで聞き、土砂災害が起こりうるかもしれない場所を地図で表したハザードマップを、各自治体が作成・配布している。これらの複数の対策がありながらも、毎年のように被害を出している原因は何なのだろうか。

一つ目の問題点は、国民全体の土砂災害に関する意識が低いことだと思う。例えば私の家は千葉県北西部にあるが、筑波山がうっすら見える程度で家周辺からは、ほぼ山は見えない。日本は国土のほとんどが急峻な山林なのに、人口の二割以上が身近に山がない関東平野に住んでいては実感が湧かない人が増えてしまうと思う。さらに、山がない場所でも急傾斜地や小高い丘などがあれば地すべりなどの危険があるが、土砂災害といえば崖や山あいの集落の傍の斜面といったイメージが強く、他人事として捉えられているのが現状だ。「土砂災害は身近にある」ということを、山に近い人々だけでなく全国に周知徹底することが土砂災害に対する意識を高める第一歩になると考える。

二つ目の問題点は、対策が建設物主体になっていることだと考える。砂防ダムにしても年々埋まってしまい、いざという時に機能しなかったり、川のゆるやかな浸食が魚の産卵の妨害になっていて自然が壊されたりしている。真の対策を考えれば危険区域に人を住ませないことなのだろうが、最初述べた通り日本は山がちな国であり、現実には厳しい。建設物に頼るのではなく、自分たちが動くことが重要だと思う。例えば、ボランティアが近

令和4年度「土砂災害防止に関する絵画・作文」作文中学生の部  
全国治水砂防協会千葉県支部長賞

くの禿山に植林に行くなどである。土砂災害に対する意識も高まるし、地すべり防止の効果が期待できる。また、前にも述べたハザードマップが、思うように社会に浸透していないというのも事実である。発行はされているものの、市役所や公民館など普段訪れない場所に貼ってあったり、アプリ版も存在を知らないという声が多くあったりする。事前対策に必要なハザードマップは、駅や店に提示したり、スマホには緊急地震速報レベルの重要度で情報を発信してほしいと思う。土砂災害の特徴の一つに個人でできる対策があまりないというものがある。確かに対策をするにしてもハザードマップを見て避難経路を確認するくらいで、他の災害対策でもやっていることであり、個人が土砂災害のためだけにする対策は存在しない。対策が少ないからこそ、せめて前述の「ハザードマップを見て避難経路を確認すること」ぐらいはしっかりやらなければならない。

最後の問題点は、土砂災害のことが注目されない点である。一つ目の問題点と似ているが、それだけ根本の問題だと考える。注目されない理由としてまず考えつくのは規模である。一つ一つは悲惨であるし、熱海市の例もあるが、基本的に土砂災害はそれ自体は予兆も地味であり、規模が小さい。起こった身には人生を変える大惨事でも、大半のものは交通事故レベルの扱いであり、洪水や台風などとは注目度がまったく違う。しかも、注目されない土砂災害は他の災害より圧倒的に頻度が高く、他の災害よりも多くの犠牲を出している。個人でできる対策は限られていて、注目度も高くないのが土砂災害である。土砂災害を「減災」するには、個人が高い意識を持ち、自ら情報を集めに行くくらいの興味を持って生活してもらうことが重要だと思う。最後に日本全国の人に覚えておいてほしい言葉を紹介する。「土砂災害はすぐ傍に居る」